



デザイン物産展で石川の伝統工芸品として選ばれた山中漆器の佐竹清光さんの背高汁椀。

「デザイン物産展ニッポン」(2008/8/27~9/1 東京・松屋銀座)
石川県からは金沢21世紀美術館と並んで加賀市から、山中漆器の佐竹清光さんの背高汁椀、丸八製茶場さんの加賀棒茶、そして加賀日和が選ばれた。



手仕事の技。
和のデザインの凛とした
美しさと心地良き。
南加賀には、
日本人のDNAに刻まれた、
懐かしくて美しいデザインが
たくさんある。

MINAMI KAGA NO DESIGN

南加賀のデザイン。

写真・文 タカヤナギユタカ

●日本の個性とデザイン。 地方の存在の大切さ。

使うことに忠実に作られたものに自然で暖かみのある美しさがあるという「用の美」を唱え、民芸運動を起こした柳宗悦は、今から60年以上前の戦時中に執筆した『手仕事の日本』で、日本各地に残る美しい手仕事を紹介しながら、手仕事がいかに大切なものであるかを訴え、日本が素晴らしい手仕事の国であること、手仕事の品物を生み出す地方の存在こそが未来の日本にとって大切だと言っている。

今年の夏にナガオカケンメイ氏がコミッションを務めて東京の松屋銀座で開催された日本デザインコミッセイのデザイン物産展ニッポン。日本の「ものづくり」は、今どうなっているのか？47都道府県から集めた5つのデザインから日本の個性とデザインを見るという試みは、ナガオカさんが意図したものかはわからないけれど、60年以上前に執筆された『手仕事の日本』に通じるものがある。

南加賀は、4世紀から続く加賀絹、世

●手仕事と産業革命と デザインの誕生。

日本を代表するグラフィックデザイナー、原研哉の著書『デザインのデザイン』によると、デザインの源流はイギリスで起こった産業革命に遡る。何百年という気の遠くなるような時間をかけて磨かれてきた繊細な手仕事が機械による産業化によって歪められ、それ「たいする人間の美的感受性の反発として『デザイン』という観念が生まれたのだと。

そして19世紀後半から20世紀初頭にかけてイギリスを中心に、機械による量産を否定し中世の手仕事に帰り、生活と芸術を統一すべきと言う「アーツ・アンド・クラフツ運動(Arts and Crafts Movement)」が起る。

日本でも、明治以降の殖産興業政策により、産業の近代化が推し進められる中で、やはり手仕事は衰退する。その一方で、国力増強のため、日本の美術工芸品が欧米に盛んに輸出され、欧米ではジャポニズムと呼ばれる一大日本ブ

界一とも言える轆轤の技術を誇る山中漆器、日本の色絵磁器を代表する九谷焼を生み伝えてきた「手仕事の地」。この地には「ものづくり」の長い歴史があり、手技があり、個性的で美しいデザインがある。

●デザインって何だ？

さて、僕たちが当たり前のように入用「デザイン」という言葉だが、デザインとは一体全体、何ものなのだろうか？辞書を調べれば、デザイン=designの語源はデッサン=dessinと同じ古いラテン語のdesignareで、記号に記すと言う意味だとある。日本語に無理無理訳せば「設計」とか「意匠」とか「形態」となるのだけれど、僕たちが日常使うデザインという言葉の意味とはどうも違うように感じられる。「デザイン家電」とか「デザイン携帯」、「デザイン雑貨」、「デザイン家具」、「デザイナーズマンション」、「デザインナースフーズ」と「デザイン」なら「デザイン」という言葉の「デザイン」には多分によくわからない幻想が入り混じっているように思えるのだ。

ームが巻き起こる。ちなみに明治20年頃には九谷焼が輸出陶磁器の第1位となつて、ヨーロッパの陶磁器生産に大きな影響を与えた。イギリスで始まったアーツ・アンド・クラフツ運動は、ジャポニズムの影響も受けて「アールヌーヴォー」や「印象派」などの様式を生み出すことにもなつた。

そしてアーツ・アンド・クラフツ運動の影響も受けて民芸運動を行った柳宗悦は前掲の『手仕事の日本』の中でこう述べている。

「元来わが国を「手の国」と呼んでもよくくらいだと思えます。…「上手」とか「下手」とかという言葉は、直ちに手の技を語ります。…手はただ働くのではなく、いつも奥に心が控えていて、これがものを創らせたり、働きに悦びを与えたり、また道徳を守らせたりするのであります。そうしてこれこそは品物に美しい性質を与える原因であると思われます」

産業革命以前、モノを作る人とそれをデザインする人は基本的には同じだった。デザインという明確な観念もなかった。そこにデザインの本質があるように思えてくる。